



自浄の技術

近藤 雅 臣*

21世紀のサイエンス，都市生活，エネルギー，産業などなどテレビや新聞では今まさに21世紀ブームの到来である。テレビをみたり新聞を読んでいると21世紀の生活がまざまざとかび，何かワクワクしてくるような思いにかられる。まさにバラ色の世紀が目前にきているような錯覚におちいる。しかし，よく考えてみると20世紀の次には嫌でも21世紀がやってくるのであり，ことさら騒ぐ必要もないというサメタ気持ちになるのであるが，ここ数年の社会変動に対するゆううつな気持ちを，輝かしい希望に満ちた21世紀ということばの中に希釈してしまいたい感情が働いているのであろう。科学技術の進歩は人類の生活をより快適なものにすることに貢献してきたことは事実であり，将来さらにそれが果てしなくより広く貢献するものであってほしいと誰しもが願うものである。しかし，現在のような21世紀ブームをみていると何か一抹の不安を感じる。それは，高度経済成長時代人々がうかれていた頃，環境汚染という思わぬしっぺ返しを地球からうけた記憶がのこっているからである。人類が自然に挑戦し，それを自らの手の中に入れるというあくなき探求

は，ついに自然物質を合成し，さらにそれを凌駕する物質を生産するところまで来た。そして，これからそれらがどこまで発展するかわからないほどの進展をしつつある。自然の産物であれば地球の自浄作用により消化されてしまうが，自然にないものあるいはあったとしてもそれが局部的に大量使用されれば，その後始末に対しては地球はそっぽを向いてしまうことは，過去の苦い経験から明白である。地球の仕組みが環境科学の立場から十分究明されておらず，とくに生物の生態がいまだ不明な点が多い現状において，後始末を前もって考えない科学技術の進歩は甚だ危険であるといえよう。過去の例からも明らかのように，その影響は技術の進歩と同時にではなくおくれであらわれてくるところに問題がある。バラ色の21世紀が語られるとき，同じ比重をもってこの危険性の排除についてふれられていないところに，まだ地球に対する甘えがあるように思われる。自然の力をこえてつくり出される文明の後始末は自然の力を借りることはできない。われわれ自らの力で後始末をしなくてはならず，その意味での自浄の技術が同時にあるいは先取りして進歩しなくては，バラ色の未来はあり得ないのではなかろうか。

*近藤雅臣 (Masaomi KONDO)，大阪大学，薬学部教授，薬学部長，医学博士，衛生化学